

Title	エスニック・ジョークについての研究 : その性質と機能
Author(s)	平田, 恵津子
Citation	大阪外国語大学論集. 18 p.251-p.267
Issue Date	1998-03-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79757
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

エスニック・ジョークについての研究：その性質と機能

平 田 恵津子

A Study of Ethnic Jokes: Their Characteristic and Function

Etsuko Hirata

My primary objective is to analyze some Brazilian jokes about two ethnic groups — Portuguese and Japanese, putting them in their socio—historical and cultural context and to examine several discussions on the function of ethnic jokes.

—目 次—

- I. 本論の目的
- II. 口承文学としてのジョーク
- III. ジョークとコンテキスト
- IV. ブラジルのジョーク
- V. ブラジルのナショナリズムとポルトガル人についてのジョーク
- VI. 日本人についてのジョーク
- VII. エスニック・ジョークの機能についての考察

I. 本論の目的

特定のグループをターゲットにしてジョークを楽しむという伝統は、世界の様々な地域において観察される。それらのジョークで笑いの対象となるのは、民族、人種、地域、宗教、職業などのカテゴリーにおいて「私たち」とは何らかの異なる特徴をもつとみなされている「彼ら」である。日常生活における潤滑油とも言える笑いを誘うジョークは、一見無邪気なたわむれであるが、そこにはしばしば、「私たち」の「彼ら」に対する偏見、ステレオタイプといった否定的な意識が潜んでいる。

本稿では、多様なグループを対象にしたジョークのなかから、特にエスニック・グループに関するジョークに焦点をあてる。それは、交通手段やメディアの発達によって国境がなくなりつつあるかにみえる今日、「民族 (ethnicity)」という概念がしばしば人々を隔てる障害になって

いるからである。そこで、エスニック・ジョークを理解するうえで文化的、社会的コンテクストを考慮することの必要性を指摘しながら、ジョークが「民族」という概念によってどのように「私たち」と「彼ら」を分離しているのかを観察する。また、かつてエスニック・ジョークの機能について与えられた様々な見解を考察したうえで、個人の衝動的感情的反応である笑いを導くべきジョークの機能を、論理的に定義することの意義と可能性に疑問を投げかける。

本稿は、ブラジルで語られるジョークを対象としている。引用したジョークはできる限り、日本語に翻訳したが、日本語で意味をなさない場合、共通言語としての英語に訳した。また、日本語、英語ともに翻訳不可能な部分のみポルトガル語を使い、説明を加えている。

II. 口承文学としてのジョーク

ユーモアは日常生活の様々な場面にあらわれるが、本論で取り上げるのは小話やなぞかけの形式で語られるジョークである。

小話となぞかけは、人を笑わせようとするときによく使われる形式である。小話は「落ち」で終わる短い語りで、語りのすべてはこの「落ち」を導くために存在する。そして、そのユーモアは最後でいかにうまく「落とす」かにかかっている。なぞかけジョークは、一般的ななぞかけ、または、なぞなぞと同様、質問と答えで構成される。しかし、相手がなぞに答えることができるかどうか挑戦することが後者の目的であるのに対して、ジョークのなぞかけの場合、なぞをかける人は相手が質問に答えられることを予測していない。なぞかけジョークは、なぞをかける人自身が答えも出すという、一種のひとり芝居である。もし相手が偶然その答えを知っていたら、なぞをかけた人の意図—答えの意外性によって相手を笑わせる—は「不発」に終わってしまうことになる。

小話にせよなぞかけにせよ、それらは作者が誰であるかに関係なく、不特定多数の人々によって繰り返し語られる一種の口承文学である。そして、口承文学の常として、それらは内容を変えながら時代と場所をこえて語り継がれていくのである。

III. ジョークとコンテクスト

フランスの哲学者ベルクソンはその著書で、笑いを生むものの基本定式を「こわばり」という鍵概念によってとらえる。ベルクソンによると、社会はそこに住む人々の相互的適応のために緊張と弾力を要求する。そして、それらが欠けるということは、精神なり性格なり肉体なりの硬直、つまり本来しなやかであるべき生が「機械化」されることであり、それがこっけいを生む。このこわばりはすべて社会にとって懸念の種となる。なぜなら、それは「中心はずれ」のしるしであるかもしれないからだ。だから、そのこわばりに対して社会は笑いという罰で応える。笑いを「全体的完成という実用的目的を追及」した「一種の社会的身振り」だとするベルクソンの解釈は、ジョークをはじめとする大衆芸術 (folklore) が共同体の文化の安定を維持する機能をもつ

とするウィリアム・バスコムの解釈と重なる。

社会におけるジョークの機能については後で詳しい考察を加えるが、このベルクソンの「こわばり」の概念は、対象の愚かさを笑うジョークのおかしみを理解するのに有効な手段であると言える。たとえば、次のジョークを見てみよう。

（１）Did you hear the one about Manuel, the Portuguese immigrant living in Brazil who telephones Portuguese Airways in downtown Rio and asks:

“Could you please tell me how long it takes to fly to Lisbon?”

“Just a minute...,” said the clerk.

“Thank you,” said Manuel, and he hung up. ^{（１）}

これは、ブラジル人がよく笑いの対象にするポルトガル人についての数多いジョークのひとつである。このジョークのおかしみは、マヌエルが航空会社の社員に言われた「Just a minute（ちょっとお待ちください）」を文字どおり「１分」と受け取ったところからきている。柔軟な思考に欠けるマヌエルの反応は機械的なぎくしゃくしたもの、つまりベルクソンのいう「こわばり」であり、それがおかしみを生みだしていると言える。このあと引用するほかのポルトガル人についてのジョークも、そのおかしみの根拠をベルクソンの「こわばり」で説明することができる。

しかし、ベルクソン自身がこの定式は「滑稽なるものがいかなる混合物からも純粋であるような基本的な、理論的な、完全な事例には当てはまる」と言っているように、すべてのジョークのおかしみを説明するものではない。なぜなら、笑いは本来感情的な反応であり、人は笑いを隠れみのにして憎しみや軽蔑という否定的な感情を表わすこともあるからである。たとえば、次に引用するひどく趣味の悪いジョークのように、敵対的な民族感情がジョークのきっかけと考えられるとき、「こわばり」の定式は意味をなさない。

（２）ユダヤ人とピザの違いは何だかわかるかい。

ピザはかまどに入れられても叫ばないってことさ。 ^{（２）}

このジョークを論じるには、聞き手側の反応によって機知を無害である抽象的なものと傾向的なもの（露出的、敵対的、シニシズム的、懐疑的なものを指す）に区分したフロイトの考察が有効であろう。しかし、ベルクソンの著書は、主に古典喜劇から笑いの素材をとって書かれた一種の芸術論なので、彼の理論で説明できない「笑い」をいちいちあげつらうのは、彼の著書の本来の価値を見落とすことであり、本論の展開にとっても意味がないことである。

私たちはジョーク（１）と（２）の間にあるひとつの共通点に気づくことによって、ジョーク

を理解するときに欠かせない重要な要素を知ることができる。その共通点とは、ジョークの対象が双方ともに特定のエスニック・グループであり、それがほかのエスニック・グループに置き換えられると、そのおかしみ—（２）のジョークがおかしいかどうかについてはここで議論しない—は失われてしまうということである。（１）のジョークの場合、国境をこえるとその対象は変わる。しかし、そのとき対象の選択は任意のものではなく、ジョークを語る人のエスニック・グループに応じて特定のグループに限定される。たとえば、このジョークがアメリカ人—いわゆる WASP—によって語られるとき、その対象はポーランド人となるであろうし、イギリス人によって語られれば、アイルランド人に姿を変えるであろう。そして、これがブラジル人によって語られるときには、その対象はポルトガル人でなければならないのである。

これは、ジョークを理解するには、そのおもしろみを構造的に分析するだけでは不十分で、そのジョークを成り立たせている背景、つまり歴史、文化、社会のコンテキストにおいて考察しなければならないことを示している。（１）の場合、ブラジル社会におけるポルトガル人の歴史のかかわりを知らなければ、このジョークの対象がポルトガル人である必然性は理解できないし、（２）の場合、ユダヤ民族の歴史的災難を知らなければ、そのジョークが意味していることすら理解不可能である。

ジョークがジョークである得るには、語り手と聞き手がその背景にある様々なテキストを共有していなければならない。ジョークがかきたてる笑いは一見プリミティブで個人的な感情反応に過ぎないようだが、実はそこには複雑な共同体の価値や信念が介在しているのである。ゆえに、エスニック・ジョークは文化の鏡だと定義したウィリアム・M・クレメンツが主張しているように、ジョークは、それを語るグループが相手グループをどう見ているかを描き出すものであると同時に、それを語るグループ自身の文化的価値観を映し出したものである。つまり、ジョークを理解するということは、それを語るグループを理解することでもあるのだ。

Ⅳ．ブラジルのジョーク

ブラジルでは、小話やなぞかけの形でその対象をからかうジョークはピアダとよばれる。ブラジル人はことあるごとにピアダを語ったり、聞いたり、読んだりして楽しむ。また、今日ではインターネットを使ってピアダにアクセスすることができるため、ブラジル人は世界のどこにいても故郷のジョークを楽しめるわけだ。

ピアダを語る際、それがピアダだとわかるような、またはそれを使わないとジョークがうまく機能しないようないくつかの要素がある。それは、そのグループのメンバーに典型的な名前であったり言語的癖であったりする。たとえばポルトガル人のジョークの場合、登場人物の名前はジョアキンかマヌエルに決まっていて、その名前を聞いただけで人々の顔には条件反射的に微笑みが浮かび、それから語られるであろうジョークに期待で胸をふくらませるのである。

ありとあらゆるものをジョークにして笑いとはばすブラジル人にとって、そのターゲットは幅広

い。多人種、多民族国家であることから特定の民族、人種に関するピアダは数知れないし、その広大な領土に起因する地方気質をとらえたピアダも数多い。宗教や職業グループもその対象の例外ではない。ブラジル人の根強いマツォ信仰を反映した、男性同性愛者についてのピアダは人気があるもののひとつだ。ピアダは必ずしもグループを対象にしているわけではなく、政治家、有名人といった個人もターゲットにする。また、ピアダは「彼ら」についてばかりではなく、「我らブラジル人」をも種にして容赦なく笑う。そのほか、筆者が収集したもののなかには、象やトマトなど人間以外のものについてのピアダもあったが、それらは寓話である場合も全くのナンセンスである場合もある。ピアダは、ブラジル人のユーモア精神をよく表しているが、同時にブラジルの社会、文化、国民感情を理解するうえで非常に興味深い材料を提供していると言える。

はじめに述べたように、本論ではエスニック・グループについてのジョークを取り上げる。まずは、ブラジルに存在する多様なエスニック・グループのなかでも最もよくターゲットにされるポルトガル人のジョークを考察する。そして次に、筆者が日本人であるゆえに特に興味をひかれる日本人についてのジョークをみてみたい。

V. ブラジルのナショナリズムとポルトガル人についてのジョーク

文学批評家ワナー・ソラズは、「民族」の概念はアメリカ独立戦争やフランス革命以後、ナショナリズムの発達とともに広がっていったと指摘する。そして、ブルジョア革命や民族独立運動を契機として、民族と言語の境界が無視された古い貴族的あるいは植民地的秩序が崩壊し、かわってナショナリズムと民族が境界線を描くようになり、さらにはそれが「排他的な集団となって集団への忠誠を要求するようになった」⁽³⁾と言う。そして、この「排他的な集団」となった民族や国家への帰属意識を支える重要な役割を果たしたのが、詩、小説、演劇といった狭義の文学やおとぎ話、民謡、土俗信仰といった民間伝承（ソラズの言葉を借りると「大衆の芸術形式」をとった「識閥下の文化」）であったと主張する。ナショナリズムと民間伝承とを関連させたこのソラズの指摘は、民間伝承のひとつであるエスニック・ジョークを考察する上で興味深い。

ポルトガル人についてのジョークをブラジルのナショナリズムという観点から論じているのは、ブラジル文化・社会の理解を目的として広義の文学を研究するネルソン・H・ヴィエイラである。ヴィエイラは、ポルトガル人をターゲットとした風刺やジョークは、1822年にブラジルが政治的独立を獲得して以来、ブラジル人のポルトガルに対する「政治的、文化的復讐心のはけ口」であったと考える。そして、いつまでも大国としての過去の栄光にしがみつき、ブラジルが属国であるかのような態度をとるポルトガル人の度し難いプライド、愛国心をジョークのテーマにしてからかったと主張する。ヴィエイラが引用しているいくつかのジョークのうち、そのような感情が巧みなユーモアとなって現れているのは次のジョークである。

(3) マヌエルはブラジルに移り住んで1年後に妻のマリアを呼び寄せた。到着後、彼女は町を少しばかり歩いて回ったが、ひどく驚いてすぐに家に逃げ帰った。そして、あわてふためいて夫に言った。

「マヌエル、こんな国から一刻も早く出て行きましょう。ちょっと町を歩き回ったんだけど、ここの人たちが話していることときたら、一言だってわからなかったわ。」

しかし、マヌエルはマリアをなぐさめながらこう答えた。

「心配するんじゃないよ、奴らは日に日に上達しているんだから。わしが初めてここにやって来たとき連中がどんな風に話していたか、お前がもし知ってさえいたらな。」

これは、ポルトガルで話されているポルトガル語とブラジルで話されているポルトガル語が同一言語とは言え、その違いに慣れていないととまどうほど発音が異なることをとらえて作られたジョークである。時がたつにつれて自分の方がブラジルで話されているポルトガル語に慣れていっていることを理解できず、周りにいるブラジル人のポルトガル語の方が「上達」して、自分の理解可能なものになりつつあると感じているポルトガル人移住者のまぬけさをからかっているわけだが、これはポルトガルで話されているポルトガル語が正統なものであると主張するポルトガル人の元植民地ブラジルに対するショーヴィニスティックな態度を揶揄したものである。

次のジョークもポルトガル人移住者の話であるが、ここでは元支配者としてのポルトガル人のブラジル人に対する「優越感」は表わされていない。

(4) ジョアキンが大西洋を渡りブラジルへ移り住むことになった。彼は一匹の猫を飼っていたが、都合で連れていくことができない。その猫を非常に愛していたジョアキンは友人のマヌエルに頼んだ。

「マヌエルよ、神にかけてのお願いだ。頼むからわしの猫の面倒をみてくれ。そして、どんな様子かいつもいつも知らせてくれ。」

「わかったよ、ジョアキン。心配するな。わしが、いつも様子を知らせるさ。」

ブラジルで生活を始めたジョアキンは、ある日マヌエルから一通の手紙を受け取った。

「ジョアキン、お前の猫が死んだ。」

ジョアキンはあまりもの悲しみに具合を悪くした後、マヌエルに次のような手紙を書いた。

「マヌエルよ、お前はそんな風に伝えるべきじゃなかった。お前はわしに心の準備をさせるべきだったのだ。最初の手紙に、<ジョアキン、お前の猫が屋根に登ったよ>と書いて、次に<ジョアキン、お前の猫が足をすべらせたよ>。それから、<ジョアキン、お前の猫が屋根から落ちたよ>。そこで、やっとお前は書くんだった。<ジョアキン、お前の猫が死んだよ>とね。」

「わかったよ、ジョアキン。ほんとにすまなかった。」

それからしばらくたって、ジョアキンはまたマヌエルからの手紙を受け取った。

「ジョアキン、お前のおふくろさんが屋根に登ったよ。」⁽⁴⁾

「まぬけないなか者」のポルトガル移民ジョークの裏には、ブラジルの独立後もよりよいチャンス求めて大西洋を渡ってきたポルトガル人移住者たちのイメージがある。ポルトガルの貧しい地方からやってきた生真面目で無骨な農民たちは、ブラジル人にとってかっこうの笑いのたねとなったのである。

しかし、19世紀前半ブラジルが開港して以来、新天地をめざしてやって来たのはポルトガル人だけではなかった。とりわけ19世紀の後半には、イタリア、ドイツ、スペインなどヨーロッパ各地からの移住者が、大きな波となってブラジルへ押し寄せた。これらの移住者の多くは、その出身国にかかわらず、素朴で教養のない貧しい農民であった。では、なぜそのなかで「まぬけないなか者」のジョークがポルトガル移民の専売特許とでもいうものになったのであろうか。それについてヴィエイラは、独立以降、特に19世紀後半、ブラジルの植民地体質からの脱皮と近代化をめざしたナショナリスティックな動きと関連して考える。そして、ポルトガル人についてのジョークには、独立国家ブラジルの自尊心（a boastful pride）と文化的自己防衛の態度（a cultural self-defensiveness）が映し出されている一方で、宗主国であったポルトガルの「威厳あるヨーロッパ文化」に対する新興国ブラジルの根本的な不安、自信のなさ（basic insecurity）といった相反する感情が隠されていると主張する。また、ポルトガルによる植民地支配が残した負の遺産に対する恨みの感情も存在したことを指摘する。ブラジルが真の独立、つまり政治や経済面のみならず、文化面においてもポルトガルからの分離をめざしていたとき、ポルトガルへの対立意識が様々な場面で現れたのは自然な過程と言えよう。ブラジル人の強い愛国心の裏に隠されたポルトガルに対する恨みや伝統あるヨーロッパ文化に対する劣等感が、ブラジルにやって来たポルトガル移民の「愚かさ」に対するからかいによって笑いに形を変え、発散されたというヴィエイラの説は妥当であろう。そして、それが意識的なものであろうとなかろうと、人々は「まぬけないポルトガル人」を笑うことによって、彼らとは異なる自分たちのアイデンティティーを形成していったのであろう。

イギリスの社会学者クリスティ・デーヴィスは、世界のエスニック・ジョークを「まぬけ」、「狡猾」、「不潔」といったテーマごとに比較し、その対象となるグループとジョークを語るグループとの間にパラレルな関係が存在することを指摘する。そして、相手をまぬけとするジョークが語られるのは、「私たち」と「彼ら」が＜同じ家族＞に属していて、その境界があいまいなものであるときであると主張する。

Ethnic jokes about stupidity are rarely told about groups that are very different

from the joke-tellers or perceived by them as totally different. Rather, such jokes are kept “within the family” and are told about peoples whose identity relative to joke-tellers is ambiguous (they are almost like us but not quite the same), people whom the joke-tellers can regard not mysterious foreigners but as a kind of inferior [i.e., stupid] imitation of themselves. ⁽⁵⁾

新しい国家、国民としての独自のアイデンティティーを模索するプロセスにおいて、ブラジル人がポルトガル人を自分たちの「劣等な（つまり、まぬけな）ものまね（a kind of inferior [i.e., stupid] imitation of themselves）」として笑い、切り離すために、無骨なポルトガル移民は最高のイメージを提供したのであろう。

愚か者としてジョークに現れるポルトガル人は、必ずしも移民であるとは限らない。たとえば次のジョークでは、登場人物のアイデンティティーを示すのは国籍のみで、その舞台もブラジルとは特定されていない。

（５）ある時飛行機が不時着し、ポルトガル人とドイツ人とフランス人が砂漠に残された。歩き疲れて絶望的になっていた三人は、砂に半分埋もれた古いランプを見つけた。それを掘り出してこすってみたところ、なんと大きな魔神が現れて彼らに言った。

「ご主人さま、あなた方は三人いらっしゃるの、ひとりにひとつづつ願い事をかなえてさしあげましょう。」

そこでドイツ人が言った。

「魔神よ、私が望むことはただひとつ。ドイツに戻ることだ。」

ポフ！ドイツ人はドイツへひとつとび。次にフランス人が、

「ああ、魔神よ。私が望むことはただひとつ。フランスに戻ることさ。」

ポフ！フランス人はフランスへひとつとび。最後に残ったポルトガル人は、

「ああ、魔神よ、ひとりになって、わしは寂しくて寂しくてしかたがない。どうかあのふたりを呼び戻しておくれ。」⁽⁶⁾

先に引用したふたつのジョーク（３）と（４）に比べると、このジョークに登場する「愚か者」は愚かであるほか何ら特徴はなく、ゆえにこれがポルトガル人である必然性はなさそうである。しかし、フランス人とドイツ人を置き換えることはできても、この「愚か者」をほかの民族に置き換えるやいなや、このジョークのおもしろさの半分以上は失われてしまうだろう。なぜなら、ポルトガルからの移住者が減り、日常生活でのポルトガル人との接触の場が失われた今でも、ブラジル人にとって、まぬけなことをして失笑を買うのはポルトガル人と決まっているからである。ブラジルのジョークの世界において「まぬけなポルトガル人」は記号化されているのだ。

今日、ブラジル市民にとってポルトガルによる植民地支配やブラジルの独立は遠い過去、歴史の教科書に存在することにすぎない。もちろん、現代ブラジル社会が抱えている様々な問題や矛盾はそれらの過去に関連して考えられねばならないだろう。しかし、日常的な感情として過去の支配者ポルトガル人に対する恨みや、自分たちのアイデンティティーを脅かすものとしてのポルトガル人への怖れなどがあるとは言いがたい。いまだに盛んに語られるポルトガル人についてのジョークが時代をこえて受け継いできたものは、ポルトガルに対する19世紀のブラジル人の感情より、むしろポルトガル人のまぬけさをばかにして笑うという習慣だと考えるべきであろう。ヴィエイラは、ポルトガル人についてのジョークの背後にあるブラジル人の感情を悪意のこもったものとは考えず、ポルトガルに対する「無邪気な敵意」（harmless hostility）であると考え。そして、ジョークの動機を「たちの悪いいたづらをしたり、誰かをだしにして笑うためにはいかなるすきをも見逃さないひょうきんで狡猾なブラジル人の性質」（the humorous and devilish nature of the Brazilians never to overlook an opportunity to play a dirty trick <sacanagem> or to laugh at someone else's expense）に帰している。

一方、ポルトガル文学、ポルトガル語圏アフリカ文学研究家でありエッセイ作家でもあるエドゥアルド・M・ディアスは、ポルトガル人の視点から、ポルトガル人とブラジル人との間で応酬されるジョークについて、ブラジル人に対する愛情をこめながらユーモアたっぷりに考察している。「ブラジルでサッカーの次に人気のある娯楽はポルトガル人についてのジョークを語ることだということは、科学的に確立されたひとつの事実である」というユーモラスな文章で始まるディアスの考察も、ヴィエイラと同様、ジョークを歴史のコンテクストにおいてなされている。

ディアスによると、ブラジル人が語るジョークに現れるポルトガル人の国民的特徴は四つある。それは、まぬけであること、体を洗わないこと、“v”を“b”で発音してしまうこと、黒人女性に目がなないこと、である。そして、特に一番目の特徴に関するジョークは数知れないと言う。

ディアスも「まぬけなポルトガル人」についてのジョークの起源を、ポルトガルの小さいな村から海を渡ってやって来た移民のイメージに見い出す。そして、そのようなジョークの発生を全く理由のないことではないとして、「少なくとも、都会に住む洗練された、冗談好きのブラジル人は、財布をいっぱいにして故郷に帰ることを夢見て小さな村からやって来たばかりの、慣れない都市文明の前に困惑し、おどおどした我らが哀れな移民の習慣に一種優越感を感じたであろう」と言う。1960年までブラジルの首都であったリオ・デ・ジャネイロ（以後、リオとのみ記す）は、特に多くのポルトガル人が住みつき、パン屋や食料品店などを開いて小さな商売を営んだところである。リオは長い間ブラジルの文化の中心地であり、また現在に至るまでピアダの主な発信地のひとつである。そのようなリオの住民にとって、街角のパン屋の変なポルトガル語を話す「ジョアキン」は、かっこのジョークの標的になったに違いない。

ポルトガル人の風呂嫌いについては、ディアスは、ポルトガル人が水（湯を含む）にさほど愛着を感じていなかったことは大航海時代の歴史的な裏付けがあるとして、一日に何度も水浴して

いた先住民族インディオの習慣を学んだブラジル人との違いを認める。しかし、三つ目の特徴として指摘した“v”を“b”と取り違えてしまうのは、ブラジルへの移住者が多かったポルトガル北部の住民の地域的特徴にすぎないとしている。最後の黒人女性に感じるポルトガル人の性的欲望についても、ディアスは歴史的事実から説明を試みる。そして、植民地開発の初期、新大陸に渡った白人女性の数が男性の数に比べて圧倒的に少なかったとき、「彼らのために衣類の洗濯をし、カフェオレ色した子供をたくさんつくってくれるかわいらしい黒人奴隷を選ぶ以外、彼らにいったいなにができたであろうか」、と疑問を投げかける。そして、「神は白人と黒人を創りたまひ、ポルトガル人はムラト（黒人と白人の混血種）を創った」というブラジル人がよく使う表現を引用する。

ヴィエイラとディアスは、ジョークに描かれる「典型的」な特徴が真実を映しているかどうかは別にして、過去のある時点のグループ間接触によって得られたイメージを起源とみなしている点で一致している。

ジョークの果たす肯定的な役割—共に笑い、ジョークを交換することによって、しばしば両国民を分かち小さな恨みを乗り越えられる—を信じるディアスは、ブラジル人によるポルトガル人についてのジョークに比べ、ポルトガル人によるブラジル人についてのジョークが少ないことを嘆く。しかし、これは単なる不幸な偶然とは言えまい。なぜなら、ジョークのターゲットとなるには、ある程度継続的で直接的な接触が必要であるからだ。そして、そのグループに関するジョークの伝統がいったん築かれると、その後、直接的接触が失われても、グループはその誇張されたイメージによって記号化されてジョークの世界に生き続けるのである。だが、それは永遠の命をもっているわけではない。なぜなら、新しく直接的な接触をもつようになった同じ特徴をもつとされるグループに取って代わられるからである。たとえば、ブラジルにおいてポルトガル人との日常生活における接触の機会が減った現在も「まぬけなポルトガル人」のジョークが語られていることを前に指摘したが、その数は減少の傾向にある。それは、彼らに代わって、ブラジル東北部やサンパウロ州内陸部の住民たちが「まぬけないなか者」としてブラジルのジョーク界に新しい地位を築いているからである。その背景にはブラジル国内の交通手段の発達がある。ブラジルは長い間、広大な領土のなかで異なる風土をもった地方のそれぞれが、まるで離れ孤島であるかのように孤立して存在していた。しかし、道路網の整備などが原因で、かつて分断されていた地方間の移動が容易になったのである。それをきっかけに、素朴で粗野な地方の農民が大勢、仕事を求めて都市部へと出て来たのである。そして彼らが、かつてのポルトガル移民のように、口の悪い都会人のからかいのまとなったのは想像に難くない。また、生活スタイル、価値観などが多様化している現代ブラジル社会において、ジョークのテーマ、対象も多様化している。そのようななかで、ポルトガル人についてのジョークが以前のように絶対的な人気を誇ることはもはやないであろう。確かなのは、ポルトガル人についてのジョークが語られるとき、それが必ずあのまぬけな「ジョアキンとマヌエル」の笑い話であることだ。もちろん、新しい接触によってポル

トガル人がこれまでとは異なる特徴をブラジル人に印象づければ別であろうが。

一方、ポルトガルに住む人々にとって、大西洋の向こう側に住むブラジル人は遠い存在であった。政治史におけるかわり、書物などのメディアを通して得た知識などから、「怠惰で不誠実なブラジル人」という否定的なイメージは、かなり多くのポルトガル人の意識に存在する。しかしながら、日常生活におけるブラジル人との接触が直接的なものではなかったヨーロッパ大陸に住む彼らにとって、ブラジル人についてのジョークの伝統を築くに十分な「親近感」を感じられなかったであろう。

VI. 日本人についてのジョーク⁽⁷⁾

1908年に日本からの移民船が初めてブラジルに到着してから、まもなく90年の年月が流れようとしている。この間に多くの日本人がブラジルへ移住した。様々な苦勞をへて移民一世とその子孫である日系ブラジル人は、ブラジル社会の様々な分野で活躍、その発展に貢献してきた。ゆえに、ブラジル総人口に占める日系ブラジル人の割合が約1%にすぎないものであっても、ブラジル国民の間で、その存在感は決して薄くはない。したがって、彼らもブラジル人が大好きなピアードの「攻撃」からのがれることはできないのである。

日本人についてのピアードは、主にその「民族的性格」、ポルトガル語を話すときの発音上の困難、そして肉体的貧弱（特に、男性器）をテーマとする。ひとつのピアードのなかにこれらが複合して現われることもある。

まず、日本人の「民族的性格」に関するジョークについて見てみよう。ブラジルにおいて日本人は、生真面目で無口だとみなされている。したがって、ピアードではこれらの特徴が強調される。ここで紹介するジョークは、そのユーモアを構成している重要な要素である男性の顔の表情や声の調子を文章では表現できないため、おもしろみはかなり減少する。しかし、このジョークにはブラジルにおける日本人のイメージがうまく取り入れられているのであえて引用する。

（6）タナカが家に戻って居間で新聞を読み始めると、妻がやって来て言った。

「タナカさん。」

タナカは新聞から顔をそらすことなく答えた。

「なんだ。」

「実は、うちの女中が、…」⁽⁸⁾

「おまえの問題だ。」

「でも、妊娠したって言ってるんです。」

「彼女の問題だ。」

「でも、あなたの子供だって言ってるんです。」

「わしの問題だ。」⁽⁹⁾

日本人の典型的な姓のひとつである「タナカ」は、このジョークが日本人について語っていることをわからせるキーワードになっている。妻が夫を「タナカさん」と呼ぶのは、簡単な日本語の表現を知っていて、ある程度の日本文化に通じた語り手—特に日系住民が多いサンパウロ出身のブラジル人によくみられる傾向—が、日本の「男尊女卑」文化をイメージさせたものであろう。このジョークのおもしろみは、男の無表情で乾いた反応と事態の深刻さのギャップから生まれてくる。紙面では伝えることができないが、この男は妻の質問に対して常に乾いた一本調子な返事を与える。そして、自分が「妻の目を盗んで、女中を妊娠させた」ことが発覚した重大な瞬間さえ、変わらぬ態度と調子で応じるのである。それは、ブラジル人が日本人に対して抱いているイメージ—日本人、特に男性は無表情でいったいなにを考えているのかわからない—をとらえて作られたジョークである。また、あの「真面目で、性に関して淡泊そうな日本男性」（これは東南アジアの人たちが日本人男性に対して抱いている悪評高いイメージとは正反対で興味深い）が妻にかくれて女中と性関係を持つというイメージのギャップもおかしみを生んでいる。

次に取り上げるジョークは、言語的な勘違いがテーマである。これは日本人についての古典的なジョークと言えるもので、筆者も数回聞いたことのあるものだ。

(7) ある日本人がブラジルに移り住んでまもなく、その妻が男の子を生んだ。

自分たちを暖かく迎え入れてくれたブラジルに感謝の意をこめて、彼らは息子にブラジル人の名前をつけることにした。そしてブラジル人の友人になにかよい名前はないかと尋ねたところ、

“Sugiro Alberto, Ronaldo, Carlos, Antônio...”

(アルベルト、ロナルド、カルロス、アントニアなんてどうだい…)

“Ótimo nome! Ótimo nome! Nome do filho será Sugiro, né?”

(いい名だ！いい名だ！息子の名前はスジロウだ)

この日本人は息子に「スジロウ」と名づけることにしたのだが、この「スジロウ (Sugiro)」は、実は「提案する」という意味を表すポルトガル語の動詞が活用したものである。それを友人が薦める名前のひとつと勘違いして息子につけるところにユーモアがある。

結局、日本人の名前に一番近い発音をもつ名前を選ぶというこの男の選択は、しばしば閉鎖的共同体を作り、「ブラジル人」とは分離的なアイデンティティーをもつと批判される日系のブラジル社会における位置を考えると風刺的でさえある。

これが、イチロウ、タロウ、ジロウなど「ロウ」で終わる男性名が多いことから作られたジョークであることは明らかなだが、実際「スジロウ」という名前は日本人には聞き慣れないものだ。しかし、ジョークではあまり細かいことにこだわらないのが決まりであり、「笑えればよい」という精神が大切なのである。

言語的誤解をテーマにしたジョークは数多く、このほかにも、ブラジルでよく知られている日本人の発音上の問題、“R”と“L”、“B”と“V”を取り違えることをとらえたものなどがある。移民大国ブラジルでは、このような言語的違いが生む勘違いを笑うジョークのターゲットは、日本人に限らない。

最後に、日本人の肉体的特徴をからかったジョークを取り上げる。ものごとの価値は本来相対的なもので、いかなる評価基準も絶対的なものではあり得ないが、日本人の肉体が西洋人に比べて「劣っている」というのは一般的に広く信じられている神話である。特に、マッチョ信仰の根深いブラジルでは、男性の肉体と精神の両面にわたる古典的「男らしさ」は男性の価値をはかるうえで、非常に重要なポイントになっている。ジョークの世界もこのマチズムに強く影響されている。そして、日本人男性は「肉体的貧弱」をからかうジョークのかっこうの標的とされる。

(8) The Japanese boy was pretty shy. One day he took his girlfriend to the movies.

Knowing that the boy wouldn't be able to do what he was supposed to, the girl took the initiative. Slowly, she slid her hand into his pants and... nothing. All that trouble...

Suddenly the boy asked:

“It's hard, isn't it?”

And she said:

“Yeah, it's hard to find.” (10)

このジョークは、日本人男性のペニスのサイズをからかっている数多いピアーダの一例である。次のジョークも同じテーマを扱っているが、日本人がやり返していて、そのやりとりが興味深い。

(9) ある日、ポルトガル人が知り合いの日本人のことをちょっとからかってやろうと考えた。

「やあ、キオト、おまえのなには、これっぽっちの大きさらしいな。」

「へえ、じゃあ、なにかい。お前の女房がお前に話しちまったのかい。」 (11)

このジョークでも、ひとりの日本人男性（キオトという名前も聞き慣れないが、「京都」がモチーフになっているのであろう）が、例によってペニスのサイズのことではかにされているが、それに対してこの男性は、自分をばかにした相手の妻との関係をほのめかして反撃する。

このジョークのユーモアには、マッチョ崇拜社会に存在するふたつの文化的価値が利用されている。まず、男性の価値を象徴するものとしてのペニスのサイズ、そして、妻の夫に対する絶対

的な貞節である。ブラジルで「妻を寝取られた男」というのは最大の侮辱であり、それを一語で表現する単語が存在するほどである。このジョークは「毒をもって毒を制した」キオトの機転のきいた切り返しがユーモアをかもし出していると言えよう。もちろんやり返される男は、ブラジル人ではなく「おなじみ」のポルトガル人である。

VII. エスニック・ジョークの機能についての考察

エスニック・ジョークを相手グループへの敵対感情から論じる研究者は多い。たとえば、道徳的な訓戒によって抑圧の下におかれていた敵対的な感情が機知の力を借りて暴露され、それによって人は快感を得るとしたフロイトの説は、「敵対心の表現」をジョークの機能として主張する理論においてパイオニア的なものである。ターゲット・グループの価値をおとしめることによって自分たちの優越を表現するという見方も基本的にはこれと同じ理論である。これに対して、ジョークで笑いに置き換えることによって敵対感情を解消するという理論もある。それが「暴露する」ものであれ「解消する」ものであれ、相手グループに対する敵対心が論点の中心であることで一致している。このような見解が生まれる原因のひとつとして、一般的にエスニック・ジョークが否定的なステレオタイプや偏見によって作られていることが考えられる。

フォークロア研究の権威アラン・ダンデスも、エスニック・ジョークに隠された敵対感情に注目する研究者のひとりである。彼は、エスニック・ジョークを成り立たせているものがステレオタイプであることを指摘し、そのステレオタイプが偏見を生みだすひとつの要素であることを危惧する。なぜなら、偏見は相互理解の妨げであり、ひいては世界の平和にとっての脅威となるからである。ゆえに、ダンデスはエスニック・ジョークの見かけのユーモアに惑わされて、そこに潜んだ危険の可能性をあなどってはいけないと警告する。

これとは対照的に、ジョークがグループ間の友情、調和をはぐくむという主張も存在する。これは、相手グループに対する友好感情を強調した見方であり、ジョークをとおして相互の親近感を強めることができるというディアスの見方と一致する。

また、相手グループに対する感情よりむしろ、ジョークを語るグループの自己イメージという観点から論じる見方もある。エスニック・ジョークを文化の鏡と定義したクレメンツに代表される見方で、そこでは、人々は自分たち自身にとって望ましくない特徴や性格をほかのグループの典型として笑うことによって、自分たちはそのような特徴などとはかかわりがないと安心すると考える。

エスニック・ジョークの機能を論理的に定義することの難しさは、それが集団的なものであると同時に、笑いという根本的に個人的で衝動的な感情反応に関わっているからだ。ジョークを理解するには、文化的、社会的コンテキストを共有していなければならないが、個々のジョークに対する個人の反応は様々である。同じジョークでも、それが語られる時やところ、まわりの状況、語り手と聞き手の関係、それぞれがどのエスニック・グループに属しているかなどによって全く

異なったものになってくる。

また、エスニック・ジョークに敵対感情と友好感情というまったく反対の感情が指摘されるのは、ジョークが成り立っている基盤—誰かをだしにして笑う—が、本来両義的なものであるからだ。ダンデスが心配するように、相手に対する偏見や悪意が強く反映されているジョークが存在するのは確かで、本論(2)のジョークもそのひとつである。そこにはユダヤ民族にふりかかった歴史的災難を悼み、その原因であるナチズムの非道なおこないを憎む気持ちは存在しない。ジョークの肯定的な役割を信じるディアスが、「健全なユーモアは民族間の障害をなくして、人と人との心の結合に貢献できる」(強調は筆者による)と言うとき、彼も「不健全な」ユーモアが存在することを暗に認めているのである。ジョークは両刃の剣なのである。

特定のエスニック・グループに対するジョークを笑うとき、フロイトが言うように、無意識のなかに閉じ込められている偏見や悪意が機知の力で暴露されるのであろう。ダンデスの懸念は、ジョークが暴露するこのような偏見や悪意がいずれ差別的態度をともなうようになることである。しかしながら、私たちは無意識のなかにある偏見や悪意によって判断や行動をすることを制限する様々な形の抑圧をもっている。それは、道徳心であったり、隣人愛であったり、良心であったりするだろう。

ベルクソンは笑いの基本的なものとして、笑いにともなう無感動、つまり、愛情を忘れ、憐憫を沈黙させることをあげている。私たちは、誰かを傷つけ、おとしめようとする明らかなる偏見と悪意に満ちたジョークのまえには、私たちの愛情を忘れ、憐憫を沈黙させてはなるまい。しかし、たくみなユーモアによって、無意識に閉じ込められた悪意や偏見が暴露される瞬間をとがめることに意味があるのであろうか。ジョークは本来、日々の生活で緊張した人々の神経をゆるめ、ほんのひととき現実から目をそらせるために存在するものではなからうか。次のデーヴィスの言葉は、ジョークの本来の意義と役割をまさしく言いあてている。

Jokes are important not because of their consequences but as a phenomenon in their own right, as a favorite pastime of many people and a great source of popular enjoyment and creativity.⁽¹²⁾

デーヴィスが言うように、ジョークはその結果によって判断されるべきではなからう。万人に等しく作用するようなジョークの機能は存在しないからだ。もし存在するとすれば、唯一、それは「彼ら」と「私たち」の間に境界線を引くということだろう。しかしながら、ジョークの機能について果てのない議論に入り込むより、そのジョークが映しだしている文化的価値観を探り、社会と人間の理解に役立てるべきであろう。

註

- (1) “The Luso—Brazilian Joke,” p. 51.
- (2) *The Emergence of Folklore in Everyday Life*, p. 77.
- (3) 『現代批評理論』、p. 610.
- (4) & (6) これら二つのジョークは、アメリカ合衆国アリゾナ州スコッツデールのブラジル人コミュニティで1993年2月20日に催されたパーティーにおいて、筆者が収集したものである。
- (5) *Ethnic Humor Around the World: A Comparative Analysis*, p. 41.
- (7) 本論で日本人についてのジョークというとき、この「日本人」はブラジルの日系人をさす。
- (8) 「女中」という言葉は、一種の軽蔑が込められた差別語として、現在ほとんど使用されていない。しかし、ブラジルにおいて他人の家庭で家事をこなすことによって報酬を得る「エンプレガーダ」と呼ばれる女性が、ブラジル社会において置かれている不当な地位を反映させるものとして、あえて使用する。ブラジルでは、低賃金で働かされるこのエンプレガーダを雇うことは、中流家庭でも大変一般的なことである。
- (9) このジョークは、大阪市内のブラジル料理レストランで働く非日系ブラジル人とのインタビューの際、収集したものである。
- (10) & (11) インターネットを通じて得られたジョークで、東明彦先生の提供による。
- (12) *Ethnic Humor Around the World: A Comparative Analysis*, p. 9.

参 考 文 献

- シグムント・フロイト（生松敬三訳）「機知—その無意識との関係—」『フロイト著作集4』 人文書院、1970年
- アンリ・ベルクソン（林達夫訳）『笑い』 岩波書店、1988年
- フランク・レントリッキア、トマス・マクローリン編（大橋洋一他訳）『現代批評理論』 平凡社、1994年
- Brunvand, Jan Harold. *The study of American folklore: An introduction*. New York: W.W.Norton & Co., 1986.
- Clements, William M. “Cueing the Stereotype: The Verbal Strategy of the Ethnic Joke.” *New York Folklore* 5, 1979, pp. 53—61.
- , “The Ethnic Joke as a Mirror of Culture.” *New York Folklore* 12, 1986, pp. 87—97.
- Davies, Christie. *Ethnic Humor Around the World: A Comparative Analysis*. Bloomington: Indiana UP, 1990.
- , “Ethnic Jokes, Moral Values and Social Boundaries.” *British Journal of Sociology* 33:3, 1982, pp. 383—403.
- Dias, Eduardo M. *Novas Crônicas das Américas*. Lisbon: Peregrinação, 1986.
- Dundes, Alan. “Slurs international: folk comparisons of ethnicity and national character.” *Southern Folklore Quarterly*, Vol. 39, 1975, pp. 15—38.
- Jansen, William Hugh. “The Esoteric—Exoteric Factor in Folklore.” A. Dundes, ed. *The Study of Folklore*. Inglewood Cliffs: Prentice—Hall, 1965, pp. 88—102.
- Schoemaker, George H., ed. *The Emergence of Folklore in Everyday Life*. Bloomington: Trickster, 1990.
- Vieira, Nelson H. “The Luso—Brazilian Joke.” *Western Folklore*, vol. 30, 1980, pp. 51—61.
- Zenner, Walter P. “Joking and Ethnic Stereotyping.” *Anthropological Quarterly*, Vol. 43, 1970, pp. 93—113.

<付記> 本稿完成にあたって、忙しいなかインタビューやジョークの収集に快く協力して下さった多くの在日ブラジル人の方たちとインターネットを通じて資料を提供して下さったポルトガル語コースの東明彦先生に感謝の意を表したい。

（1997. 9 .19 受理）